

## 9 当科における高齢者腹部緊急手術症例の検討

中塚 英樹・沢津橋孝拓・森岡 伸浩  
清水 孝王・宮下 薫

燕労災病院外科

当科における80歳以上高齢者の腹部緊急手術症例を検討し、問題点を探索した。

対象は2007年より2011年まで5年間における腹部緊急手術症例49例。男性19例、女性30例。疾患別件数は多い順に、イレウス13、ヘルニア嵌頓13、消化管穿孔11、胆嚢炎3、虫垂炎2、腹膜炎2、縫合不全1。術前併存疾患数は、同じく脳梗塞17、腹部手術16、高血圧10、糖尿病4、手足手術4などであった。入院日数は平均28.4日(1-161日)。術当日の死亡例がある一方で、合併症から長期入院余儀なくされた症例もあった。術後死亡は7例(14.2%)と高く、特に消化管穿孔例で予後が不良であった。軽快退院例のなかでも、11例(26.2%)は療養型病院やリハビリ病院へ転院となった。

高齢者緊急手術例は、いまだ予後不良である。救命できたとしても、ADL低下のために家庭では受け入れられず、最終的に老健施設へ行くことも多く、施設間の良好な連携も必要である。

## 10 当院における高齢者(80歳以上)の腹部緊急手術症例の検討

番場 竹生・酒井 康夫・森本 悠太  
田邊 匡・桑原 明史・武者 信行  
坪野 俊広

済生会新潟第二病院外科

【背景と目的】近年の人口高齢化に伴い、高齢者の腹部緊急手術も増加している。当科における80歳以上の腹部緊急手術症例の現況と問題点を明らかにする。

【対象と方法】2009年4月より2012年3月までの3年間に腹部緊急手術(術後合併症を除く)を施行した407症例の中で、80歳以上の64症例(男性25例、女性39例)を対象としてretrospec-

tiveに検討を行った。

【結果】患者背景としては術前併存疾患を57例(89.1%)に認め、内訳は高血圧症38例(59.4%)、悪性疾患(既往を含む)25例(39.1%)、心臓疾患17例(26.6%)の順に多かった。術前Performance Status(PS)はPS0-1:38例(59.4%)、PS2:12例(18.8%)、PS3:10例(15.6%)、PS4:3例(4.7%)であった。疾患内容は上部消化管穿孔4例、下部消化管穿孔7例、虫垂炎7例、腸閉塞(癌性)7例、腸閉塞(非癌性)18例、ヘルニア嵌頓15例、胆道感染症2例、消化管出血1例、その他2例であり、腸閉塞とヘルニア嵌頓を合わせると40例(62.5%)を占めていた。術後合併症は27例(42.2%)に認め、内訳は手術部位感染6例、非手術部位感染14例、腹腔内および消化管出血5例、腸管麻痺および腸閉塞3例、その他2例であった(重複あり)。非手術部位感染としては肺炎が6例(9.4%)で最も多かった。手術関連死は悪性疾患による原病死1例を含む8症例(12.5%)であった。

【結語】高齢者の腹部緊急手術においては術後合併症も高頻度で手術関連死も少なくないため、術前併存症など患者状態を十分に把握した上で手術を行うことが重要である。

## 11 緊急・準緊急手術を要した超高齢者(85歳以上)の大腸がん症例の検討

橋本 喜文・新国 恵也・河内 保之  
西村 淳・牧野 成人・川原聖佳子  
北見 智恵・岡村 拓磨

厚生連長岡中央総合病院

2006年から2011年までの6年間に当科で緊急または準緊急手術を要した超高齢者(85歳以上)の大腸がん症例を検討した。同時期の85歳以上の大腸がん手術例は101例であり、うち25例(25%)が緊急または準緊急で手術が行われていた。

この25例の平均年齢は89.5歳で、穿孔例が6例、イレウスが19例であった。切除は19例

(76%)で、残り6例は人工肛門造設またはバイパス術が行われた。遠隔転移のある進行度Ⅳの症例が10例(40%)であった。術後合併症は10例(40%)発生し、術後の在院日数は平均18日

であった。術後DIC、肺炎を併発した1例のみが術後11日目に在院死した。平均年齢90歳の大腸がん緊急手術例であるが、手術成績は比較的良好であった。

---